

～防水技術を駆使し、多様化する建築物とお客さまのニーズに
確かな技術力で応えながら地域社会に貢献する～



ビルドプロテック株式会社
佐藤 孝之 (さとう たかゆき) 社長
<2023年10月1日賛助会員入会>

【会社概要】

- ・本 社－札幌市清田区美しが丘2条2丁目1-2
- ・設 立－1962[昭和37]年3月
- ・資 本 金－2,000万円
- ・従業員数－26名(2024[令和6]年4月現在)

【主な事業内容】

- 防水工事全般
- 外壁補修工事
- 塗装工事(防水塗装)
- 改修工事(リニューアル)

今回の会員企業トップインタビューは、急速に進歩する防水工法を熟知し、新築・改修を問わず建物に合った施工を総合的にコンサルティングする会社、ビルドプロテック株式会社 佐藤 孝之 社長に伺いました。

同社は、複雑かつ多様化する建築構造物の防水対策について、最適な防水施工を施すなど、幅広いニーズに的確な技術で対応しています。また、防水工事会社としての特色を生かしながら、塗装工事、外壁工事、大規模改修工事、新築工事にも多くの実績を持ち、最適なアドバイスと監理、施工を提供しています。

Q. 貴社の創業の経緯・沿革をお聞かせください。

A. 建築物の防水に些かの欠陥があった場合、漏水が生じて雨風を凌ぐという本来の目的が果たせない状況に陥ります。壁の塗装の褪色、ドアからの隙間風が入る等々、経年損耗による欠陥の多くは我慢することも出来ますが、屋根天井からの漏水は我慢の範囲外、直ちに修繕して欲しいというのが大半のニーズです。

私は、昭和55年に代表に就任しましたが、当時の防水工事会社の施工方法は一工法が主流で、構造物に応じた選択が出来ない時代でした。建築構造も多様化する中で、一工法で全てを賄うことには難しさがあり、是非、各種工法を自社で施工可能な防水企業を目指そうと心に決め、所謂防水のデパート的総合防水業としてスタートいたしました。

まずは比較的効率的な屋根面積の小さな工事から手掛け、その後、徐々に工事規模も拡大していきました。1989年に運開した北海道電力泊発電所の建設の際には、屋根防水を請け負うこととなり、会社にとって大きく飛躍したとの受け止めです。学校などの公共施設から工場、病院、大型商業店舗など構造物に応じた適切な工法を提供するなど、高い技術をベースにお客様からの信頼を得るべく事業展開しています。

Q. 貴社の経営方針、経営者として重視していることについて伺います。

A. 当社の社名である「ビルド・プロテック」のビルドは、建築するという意味の他に創造する、あるいは造りあげるという意味があります。常に建築と防水の先端をいく企業であることを心がけています。また、プロテックは Protection(プロテクション) 建物を防御する、Technology(テクノロジー) 技術力・施工力を高める、Professional(プロフェッショナル) 最善の仕事を完遂する、といった思いが込められています。これらが融合して「ビルド・プロテック」が誕生しました。以来45年間この時の動機を忘れることなく「確実・誠実・安全」を我が社の基本理念とし、積み重ねてきました。

又、我が社を技術・技能集団として末永く継続するために技能士の養成、育成も基本方針に組み入れ、将来の堅実な発展に繋がることを目指しています。



泊原子力発電所施工時

Q. 防水工法の特徴点についてお聞かせください。

A. 「アスファルト防水」は、各種防水工法のなかでも最も古い歴史とシェアを持っています。合成繊維やガラス繊維などの芯材にアスファルトを含ませたアスファルトルーフィングを、熱く溶けたアスファルトで積層していくもので、施工上の失敗が少ない、防水の目的や状況に応じて防水層の構造を簡便に設計できる、などの長所があります。しかし施工のスピードが劣る、アスファルトの加熱溶融作業に伴う煙や臭気の発生といういくつかの欠点もあり、特に市街地での施工は敬遠される傾向にあります。アスファルト防水はこのような長所と短所を見きわめた適切な施工が大切となります。

次に「シート防水」ですが、合成ゴムや合成樹脂などの合成高分子を素材とした、幅1～2メートルの長尺ルーフィング(シート)を接着剤などで下地に固定していく防水工法です。シート防水の優れている点は、まずそのストレッチ性でシートの伸び率は300～800%もあり、また耐候性に優れ、軽量な

点です。作業のスピードアップがはかられ、屋根の軽量化にも貢献します。さらに急勾配の屋根にも適用でき、カラーコーディネートも可能です。

「塗膜防水」は、コンクリートやモルタルなどの建物(下地)に、主に合成ゴムや合成樹脂の溶液を塗布して、目的にあった厚さの防水層を形成する工法です。長所は作業の手間がかからず、複雑な形をした箇所にも簡単に施工できます。ストレッチ性もあるので下地に亀裂が入ってもある程度カバーできます。さらにアスファルト防水と比較して低温による劣化も少なく、自由な着色が可能などの利点があります。

最後に「浸透性防水」ですが、主に建物の地下部分や、下水道、水槽、貯水池など各種水処理施設、橋梁・港湾施設など土木分野のコンクリート建造物が対象となる工法です。防水材料をコンクリート躯体に塗布浸透させて、内部を緻密化して水分の浸透を防ぐものや、コンクリートの混練時に所定量を混入して、打設後の躯体自体の水密性を高めるなどの方法があります。最近では躯体保護材としても効果的に作用するので、外壁などにも積極的に使用されています。



白川浄水場防水工事施工前



同浄水場防水工事施工後

Q. 北海道は全国に先んじて人口減少が進み、労働者不足も顕在化しています。人材確保、人材育成方針についてお聞かせください。

A. 近年は、求職者が企業の需要に追いついていない状況が顕在化しており、採用環境は厳しいと感じています。その一方で、当社では経験豊富な高齢社員の定年延長を推奨しています。定年制を設けていますが、社員の実際の健康状態や仕事に対する意欲を重視し、本人が働くかどうかを判断する仕組みも設けています。社員は自分の意欲と状況に応じて引退のタイミングを決めることができることとしています。

人材育成で大切なことは、事業は、単なる仕事ではなく、夢や希望を持てるものでなければならないということです。

そのうえで、私たちの事業、防水工事業に携わることで得られる誇りを持った人材を育成していくことが、会社の重要な理念といえます。また、企業として地域に貢献することも重視しており、自らが率先して地域貢献活動に取り組むことで、従業員にもその姿勢を示し、育てていくことが重要だと考えています。

Q. 働き方改革や女性の活躍に関する取り組みについて伺います。

A. 働き方改革について、建設業界では一律のルールが適用されにくいと感じています。防水工事は天候に左右される仕事であり、雨が降ると作業ができません。しかし、週休二日制などの規制が厳格に適用されると、稼働率が5割に落ち込んでしまう懸念があります。実際、日本では4日に1日は雨が降るため、私は、職種に応じた柔軟な働き方が必要だと主張しています。

また女性活躍について、過去に「防水現場の仕事」をしたいという女性を採用しましたが、馴染むことができず辞めざるを得ませんでした。現在は見積もりや作業計画書などの業務に女性社員が活躍しており、女性の感覚を活かして優れた資料を作成して頂いています。

Q. 貴社の課題、今後の取り組み・方向性についてお聞かせください。

A. 人口減少により、働き手が減少するのは避けられない状況となっており、防水業においても一層の機械化が必要と考えています。一方、AIや機械技術の進化によって、無人化も進む可能性はありますが、機械の操作には人間の介入が必要であり、全てを機械に任せることはできません。現在、メーカーとも協力し、環境への配慮も念頭に、施工方法の改善や機械化の試験を実施しています。

Q. 特に印象に残る仕事・事柄をお聞かせください。

A. 私は、防水業界に身を置く中で、北海道電力との長年にわたる協力関係により生まれた「露出防水」や「二重防水工法」は、全国レベルで防水工事の改善につながり、日本の防水工事のスタンダードが変わったと自負しています。特に泊発電所1、2号機の建設時には、アスファルト防水が夏の高温で溶けてしまい、急勾配の屋根では効果が失われるという問題がありましたが、これに対応するため、アメリカの最新技術を導入し、温度変化に対応できる防水材料を開発しました。この防水技術は吹き付けるとすぐにゴム状に変化する素材を使用し、泊発電所ではその効果が高く評価されました。

私たちの意見を尊重し、提案を受け入れていただいた北海道電力に、改めて感謝申し上げます。

気候変動や環境への配慮が求められる現在、益々、防水技術の進化に向けて、メーカーや他の企業との協力を通じ、さらなる技術革新に取り組んでいきたいと考えています。